

思春期における対他認知体系の発達的变化

——同性同年輩の他者をめぐって——

教育心理学研究室 香 川 克

Puberty Change of Self-Others Cognitive System.

Masaru KAGAWA

The self-others cognitive system of 12-18 years old students were examined in terms of Self-Identity System(S-I.S.). Cluster analysis classified their S-I.S.s into five groups. Younger subjects tended more toward "separated others, self convergence type", while elder subjects tended more toward "non-separated others, self convergence type". Subjects in the transitional stage from the younger to the elder often looked up to a particular person as a "guiding star". These results suggest that self-others cognitive system changes with aging during early adolescence, and a particular person as a "guiding star" may play an important role in this process.

目 次

I. 問 題

II. 方 法

A. Self-Identity Systemについて

B. 調査の具体的方法

III. 結 果

A. S-I.S.の類型化

B. S-I.S.の累計と学年の関係の検討

C. 「導きの星」としての他者が出現する頻度の学年差の検討

IV. 考 察

I. 問 題

思春期は青年期の始まりに位置し、村瀬(1983)に従えば「第二性徴のあらわれ始める女子10歳ごろ、男子12歳ごろから、17-18歳まで」がおおよその範囲である。この時期には様々な変化が見られるのであるが、村瀬はこの時期を特徴づける出来事として、①第二性徴の始まりに伴い、身体的な面での大きな変化が見られること②それまでもっぱら両親に守られて過ごしていた子どもたちが、両親から離れ自立しようとする傾向が見られ始めることの二つを挙げている。同時に、このような大きな変化の時期に、両親に代わって同性同年輩の仲間たち

が重要な他者となってくるということが、これまで多くの研究者たちにより述べられてきている。

例えば、H.S. Sullivan (1953) は児童期から青年期へと移り変わるこの思春期の頃の対人関係の変化について、詳細な理論化を行う中で、少年少女期(juvenile era)と青年前期(early adolescence)の間に“前青年期(preadolescence)”という一つの独立した時期を設定し、この時期に同性・同年輩の他者と親密な関わりをもつことが、その後の発達にとって重要な意味があるとした。また、P. Blos (1962) も、初期青年期(early adolescence)における同性の友人の重要性を指摘している。彼によればこの時期には親との一体感が失われ、親の態度を内面化した価値規範である超自我が自我を統制する力が弱まっていく。親に代わって人格形成に大きな影響をもたらすようになるのが同性の友人との間の親密な交流である。この交流の中では、自分が所有したいと願う資質をもつ人として、相手を理想化することがよく起こる。そして、理想化された他者像は“自我理想(ego-ideal)”として、弱体化している超自我に代わって自我を導いていく。そのため、この時期に同性の友人ができないことは人格形成の上での障害をもたらすことがあると述べている。また、村瀬(1983)は、「思春期前半の友情の特徴は、一つには相手の中に自分に欠けている要素を見出して熱烈に相手にあこがれる傾向があること」であると述べている。このような、自己にとっての「導

きの星（これも村瀬（1983）による）」とでも言うべき他者は、Blosのいう“自我理想”として機能する理想化された他者であると考えられることもでき、思春期発達にとって重要な意味を持っていると言える。

このように、思春期には同性同年輩の仲間が持つ意味合いがそれまでの時期とは異なったものになってくる。この変化の特徴はどういったものであろうか。まず、それまでの時期には周囲の仲間すべてが「遊び仲間（Sullivanのいう“playmates”）」として等質・等価なものとして見えていたのが、他者一人一人が固有の個性を持った者として見えてくるという変化が起こっていると考えられる。いわば、仲間の個人的価値への気付きが起こるのである。この変化は、仲間の一人一人を「～はこういう人だ」と認知し評定するための枠組みをよりいっそう洗練していくことを必要とするであろう。思春期以前にも仲間に対する評定は行われていたであろうが、それらは野球が得意かどうか、とか、学業に優れているかどうか、とかいったいわば外部から与えられた基準を仲間のある一面に適用するという性質のものが中心であったといえるのではないか。それが思春期になると、仲間はそれぞれ固有の個性を持っているものとして映るのだから、このような外的な借りの基準では仲間をとらえきれなくなる。自分自身の自前の枠組みを用いて仲間をとらえることが必要になる。そして、仲間とつき合っていく中で、仲間と仲間の比較検討や様々な試行錯誤を経て、枠組みをより確かなものにしたり修正したりしていくことになるのである。さらに重要なことには、自分自身を仲間と比較して、仲間をとらえる“枠組み”の中で自分がどういう位置にいるのか、位置づけていこうという試みが起こってくるのもこの時期の特徴であると考えられる。つまり、「A君はとても～だが、ぼくはそれほどでもない」とか、「こんな時にB君はこうするだろうし、C君はああするだろうが、ぼくはこんな風にする（そしてぼくはこういう人間なんだ）」というようなことである。これは、他者像を手がかりにして自己像を明確化しようという試みであり、自己同一性形成の初期における重要な内的作業であろう。自己同一性の獲得が大きな課題となる青年期の発達にとって、こうした思春期における変化は非常に大きな意味を持つものと言えることができるだろう。

さて、このように思春期においては同性同年輩の仲間の持つ意味合いが変化する。特に、仲間と自己とをどのように関連づけて認知しているかという点において、それまでの段階と異なる新しい様式が現れていることが予想される。本研究では、このような変化をとらえるため

に、松井（1990）の“自己に対する認知と他者に対する認知を包含した1つの統合的な対人的認知体系”すなわち“対自他認知体系”の観点から思春期の発達の変化をとらえることを目的とする。

II. 方法

A. Self-Identity Systemについて

Norris & Makhoul-Norris (1976) は、“ある個人が生活の中で重要な他者と自己とをどのように関連付け、他者を手がかりにしてどのように自己を定義 (define) しているか”を表すことを提案し、これをSelf-Identity System (S-I.S.) と名付けた。彼らはG.A. Kelly (1955) のGrid Techniqueと呼ばれる方法（何人かの評定対象となる人物（これをエレメントと呼ぶ）を、「明るい-暗い」のような両極性を持つ尺度（これをコンストラクトと呼ぶ）で評定する方法）を用いて、個人の対人認知空間の中における〈現実自己〉及び〈理想自己〉と他者との間の認知的距離を算出した。彼らによれば〈現実自己〉との距離が小さい他者は、「自分はその人物に似た人間だ」という形で現実の自分の姿を明確化し定義づけていくのに貢献し、〈現実自己〉との距離が大きい他者は「自分はそういった人物とは違う人間だ」という形で自己像を形成するのに貢献している。また、〈理想自己〉との距離が小さい他者については、「そういう人物のような人間になりたい」という形で、距離が大きい他者については「そういう人物のような人間になりたくない」という形で、理想の自己像を個人は形成していく。つまり、ここでいう“認知的距離”というのは、類似性を表すだけでなく、自己を定義する際に個人がどのように他者を手がかりにしているのかを表す指標として考えられているのである。

Norrisたちはさらに、〈現実自己〉からの距離を横軸、〈理想自己〉からの距離を縦軸にとった平面上に、Grid Techniaueで用いた全ての他者をプロットした。このプロットのパターンに、〈現実自己〉及び〈理想自己〉を他者との関係の中で定義していく個々人独特の体系（すなわちSelf-Identity System）が現れると考えた。そして、臨床例の中から得られた特徴として5つを記述している。すなわち①〈現実自己〉との距離が小さい他者が存在しない“現実自己孤立”②〈理想自己〉との距離が小さい他者が存在しない“理想自己孤立”③〈現実自己〉と近い他者も〈理想自己〉と近い他者も存在しない“社会的孤立”④〈現実自己〉と〈理想自己〉との間の距離が大きい“自己疎外”⑤〈現実自己〉と〈理想自

己)との距離が小さい“自己一致”の5つである¹⁾。

また、松井(1990)は、大学生のS-I.S.を非階層的クラスター分析という統計的手法を用いて分類し、男子・女子それぞれ5つの類型を得ている。すなわち、男子での①自己一致型②準・自己一致型③中間型④準・自己疎外型⑤自己疎外型の5つと、女子での①自己一致型②準・自己一致型③中間型④現実自己孤立型⑤自己疎外型の5つである。松井はさらに、対人不安尺度とS-I.S.の類型の関連を探り、対人不安が高い群では自己一致が少なく自己疎外が多くなることを示している。

このように、S-I.S.によって、他者を手がかりにして自己を定義する様式を類型化することができると言える。そこで本研究では、中学生・高校生を対象にして、同性同年輩の他者をエレメントにしたGrid Techniqueに基づく質問紙法の調査を行い、①松井(1990)を参考にして非階層的クラスター分析によりS-I.S.の類型化を行う②得られた類型と学年の連関を見ることで発達の变化を検討する、という手続きにより思春期における同性同年輩の他者に関する対自己認知体系の発達の变化をとらえることにする。また、③村瀬(1983)のいう“導きの星”としての他者がS-I.S.の中に現れている被験者数の学年別比率を比較検討することで②の結果を補完するという分析も合わせて行うことにする。

B. 調査の具体的方法

対象 中学生・高校生265人(中学1年男子32人女子36人、中学2年男子28人女子32人、中学3年男子34人女子38人、高校2年男子33人女子31人)。中学生の調査は埼玉県下の公立中学校で、高校生の調査は東京都内の公立高校でそれぞれ行った。時間帯はすべてホームルーム時であった。回答に要した時間は35分～45分だった。

手続き 10人の評定対象となる同性同年輩の人物(エレメント)を被験者の周囲に実現する同性同年輩の他者の中から役割人物のリストに従って具体的に想起してもらい、その名前をイニシャルで書き出させた。そして、そのエレメントに〈現実自己〉・〈理想自己〉を加えた計12のエレメントを12の形容詞対(コンストラクト)によって5段階で評定させた。

エレメントに関する役割人物リストを作るにあたっては、思春期の同性同年輩関係を網羅するよう配慮し、好意的な他者として、A:一番仲のいい人・B:よくいっしょに遊ぶ相手・C:気楽なことをいろいろ話す相手・D:いやなことがあった時にうちあける相手・E:もっと仲よくなりたい人の5人、好意的でも非好意的でもない他者として、F:あなたの競争相手だと思える人・G:

なんとなく心配になる人の2人、非好意的な他者として、H:ふゆかいな人・I:あなたのことを悪く言う人・J:話をしたくない人の3人、全部で10人を想起してもらうことにした。また、コンストラクトを決定するにあたっては、まず、井上・小林(1985)の挙げた過去のSD法による研究でよく用いられている形容詞対68対の中から中学生・高校生の自己認知・他者認知を測定するのは不適切であると思われるものを除いた。そして「身の回りにいる人の中で好きな人・嫌いな人を挙げてもらい、その人を形容する言葉とその反対語を書かせてコンストラクトを引き出す」という小調査を中学生を対象として行い、井上らの項目になかった形容詞対を加え40項目とした。さらに、この40項目を用いて好きな人物・嫌いな人物を評定させるという調査を中学生109人を対象として実施した。そして、その結果について因子分析を行ったところ、好ましき・力本性(林(1978)による)・頼りがいの3因子が得られた。この3因子のそれぞれに代表的な項目を4つずつ選び、合わせて12対の形容詞対を採用した。採用した項目は、例えば“親切な—不親切な(好ましき)”“たくましい—弱々しい(力本性)”“責任感のある—責任感のない(頼りがい)”のような項目であった。

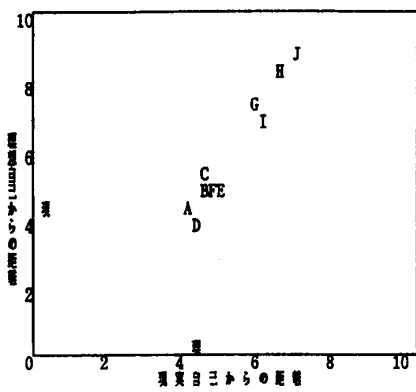
III. 結 果

一般に思春期発達の道筋については性差が大きいと言われている。このことを考慮して、統計的な計算は全て男女別に行った。

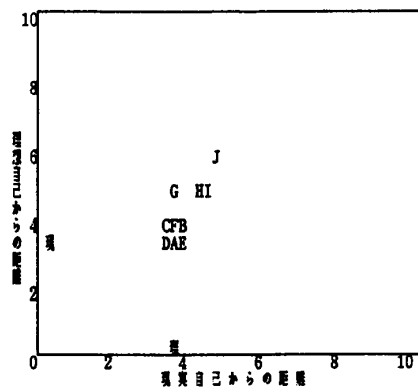
A. S-I.S.の類型化

まず、被験者ごとのデータについて、〈理想自己〉・〈現実自己〉と各エレメントの間のユークリッド距離を算出した。そして得られたすべての距離値を変数として用いて、非階層的クラスター分析を行い、S-I.S.の類型化を行った。

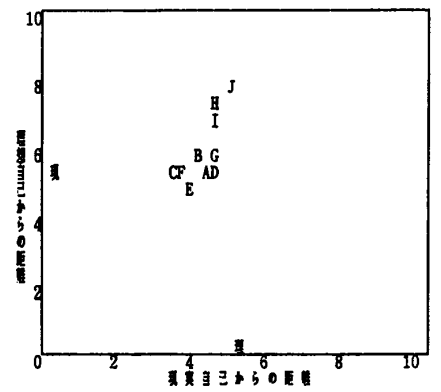
ところで、S-I.S.図で使われているユークリッド距離は評定値の差の2乗の総和をもとに作られているため、各エレメントとの距離の大きさはわかっても、方向性が相殺されてしまうという欠点がある。この欠点を補うために、エレメントをメンバーとみなした主成分分析を行い、各エレメントについて第2主成分までの主成分得点を求め、これをもとに各エレメントを平面上にプロットした図を作成した。そして、個人内空間における布置に関して方向性を確認するという作業を補完的に行った。先行研究(林(1978))や、本研究におけるコンストラクト



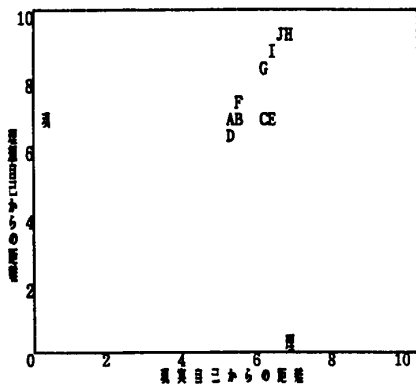
クラスター1：自己一歌・他者分離型



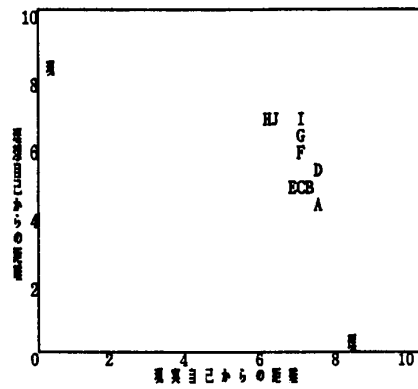
クラスター2：自己一歌・他者非分離型



クラスター3：中間型



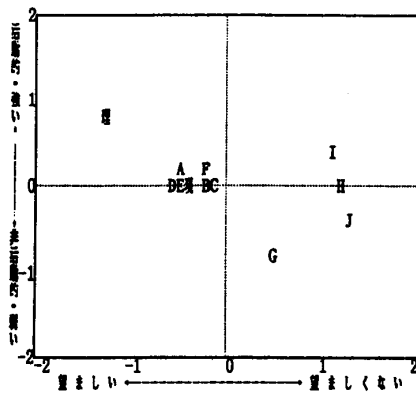
クラスター4：社会的疎外型



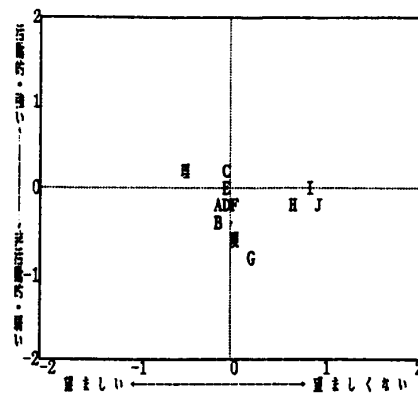
クラスター5：自己疎外・現実自己孤立型

A：一番仲のいい人 B：よくいっしょに遊ぶ相手
 C：気楽なことをいろいろ話す相手
 D：いやなことがあった時にうちあげる相手
 E：もっと仲よくなりたい人 F：競争相手だと思える人
 G：なんとなく心配になる人 H：ふゆかいな人
 I：あなたのことを悪く言う人 J：話をしたくない人
 現：現実自己 理：理想自己

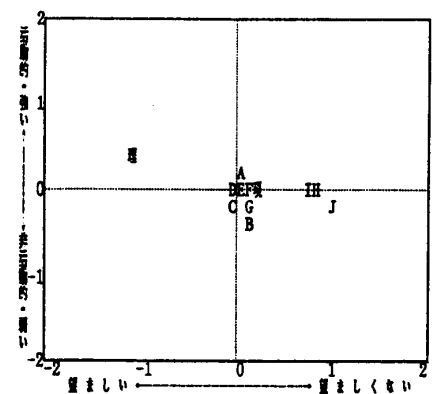
図1 各クラスターのS-I.S.図 (男子)



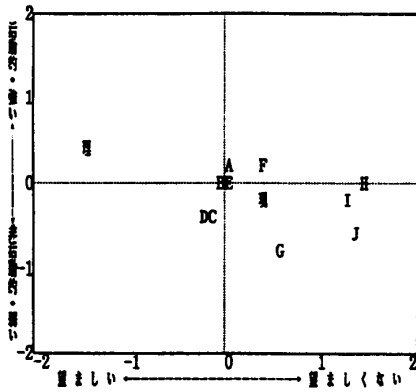
クラスター1：自己一歌・他者分離型



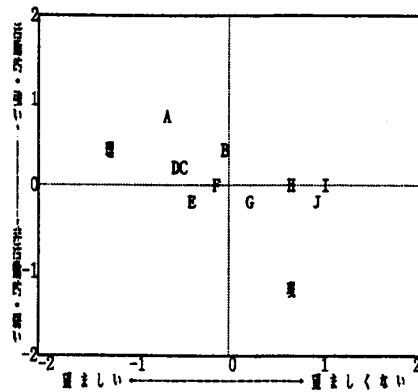
クラスター2：自己一歌・他者非分離型



クラスター3：中間型



クラスター4：社会的疎外型



クラスター5：自己疎外・現実自己孤立型

A：一番仲のいい人 B：よくいっしょに遊ぶ相手
 C：気楽なことをいろいろ話す相手
 D：いやなことがあった時にうちあげる相手
 E：もっと仲よくなりたい人 F：競争相手だと思える人
 G：なんとなく心配になる人 H：ふゆかいな人
 I：あなたのことを悪く言う人 J：話をしたくない人
 現：現実自己 理：理想自己

図2 主成分得点によるプロット図 (男子)

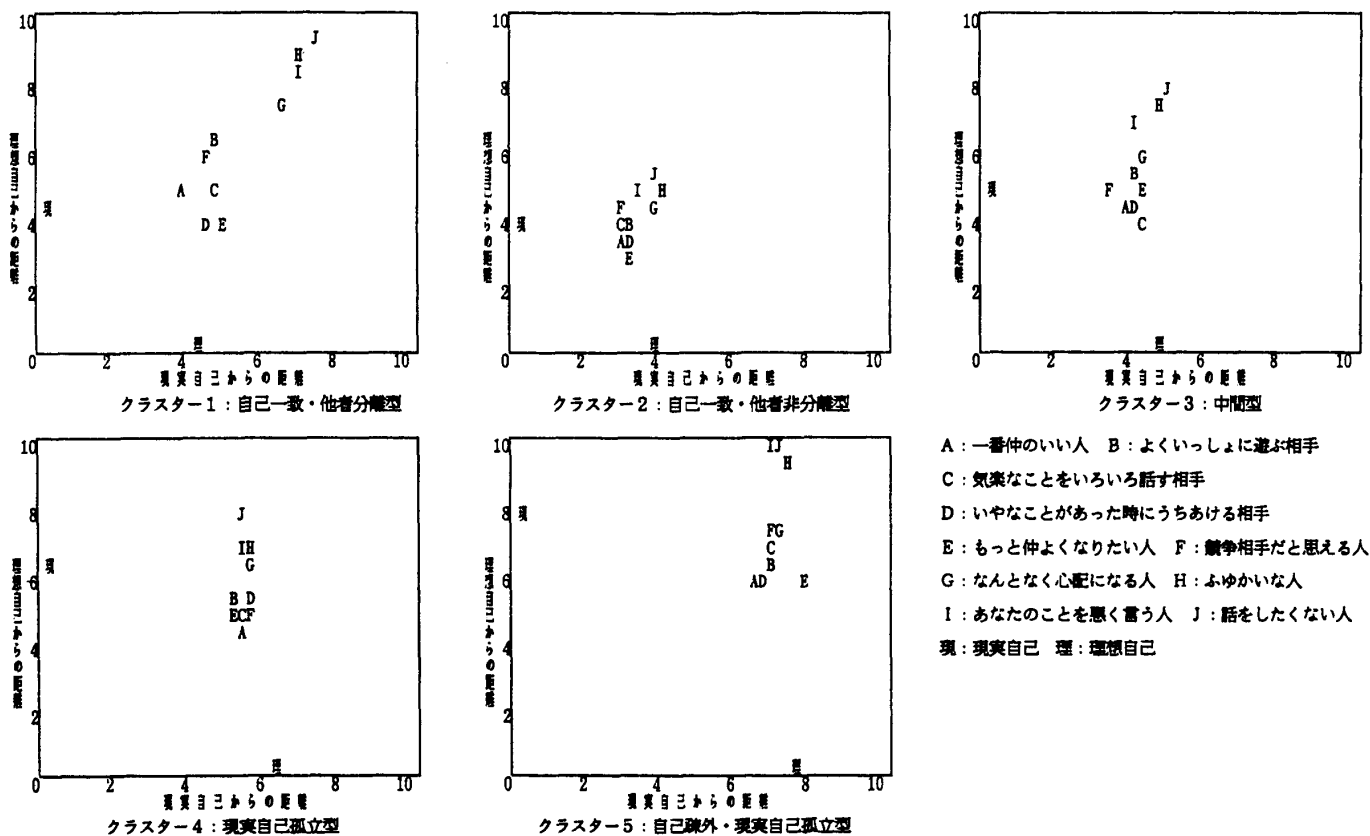


図3 各クラスタのS-I.S.図(女子)

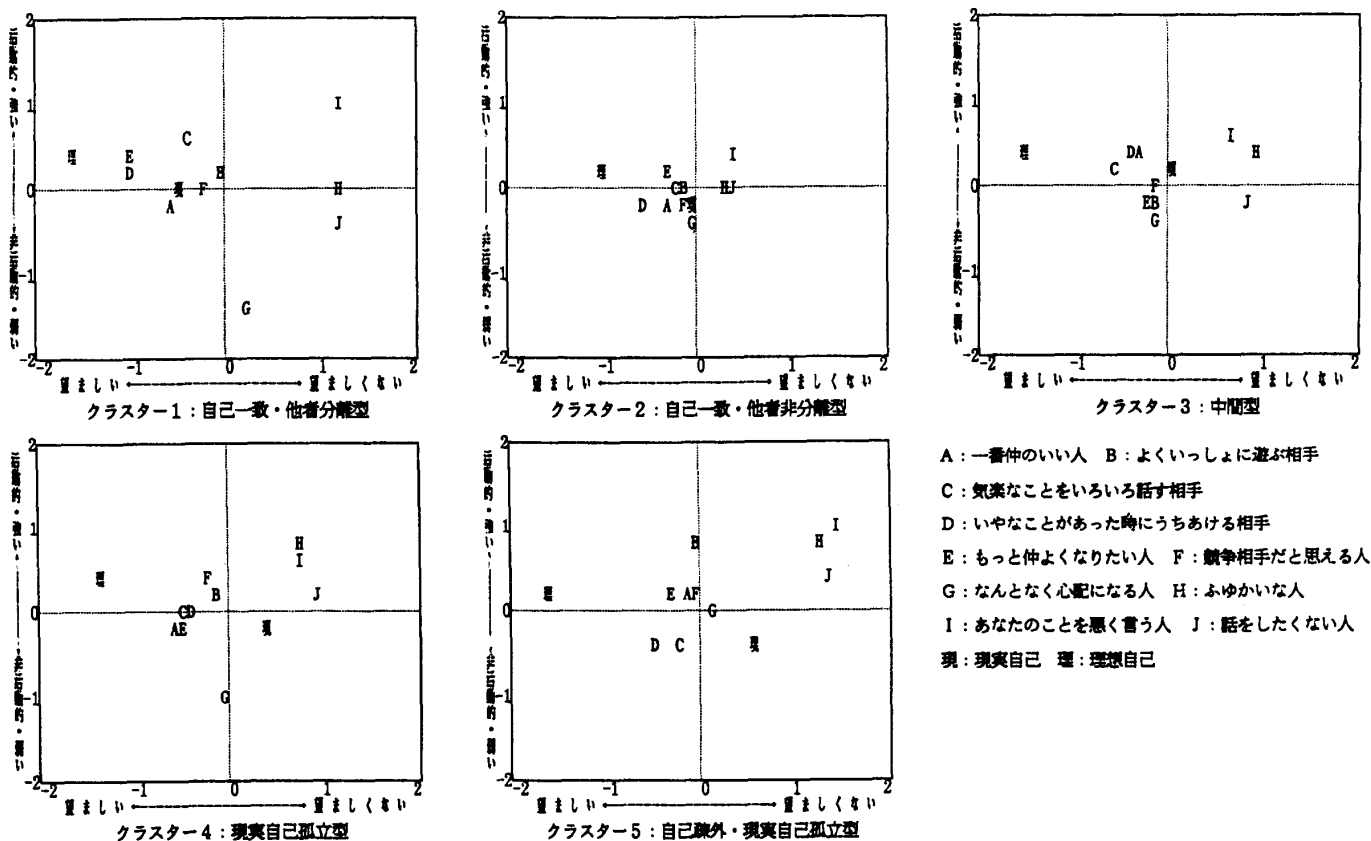


図4 主成分得点によるプロット図(女子)

決定のための予備調査での因子分析の結果によれば、対人認知の個人内空間は一般に3次元であるとされている。しかし、ここでは方向性の確認という目的のためだけに用いるのであるから、繁雑さを避け、平面上で表せる2主成分によるプロット図を用いた。

非階層的クラスター分析の結果、男子・女子ともに5つずつのクラスターが得られた。そこで、これら5つのクラスターごとに各距離値の平均を求め、それを座標平面上にプロットしたS-I.S.図を作成した(図1・図3)。

また、各エレメントをメンバーとみなして全データについて行った主成分分析の結果、第1主成分は「親切な-不親切な」「責任感のある-責任感のない」などの項目で負荷が高く、第2主成分は「おしゃべりな-無口な」「たくましい-弱々しい」といった項目で負荷が高かった。そこでそれぞれ「望ましい-望ましくない」の次元と「活動的・強い-非活動的・弱い」の次元とした。そして、各エレメントの主成分得点の平均を、5つのクラスターごとに求め、座標平面上にプロットした(図2・図4)。

これらの結果により、各クラスターの特徴について見ていく。

まず、男子についてであるが、クラスター1では〈現実自己〉と〈理想自己〉との間の距離は、かなり小さくなっている。他のエレメントは、〈現実自己〉と〈理想自己〉から等距離の所に一直線になって位置している。そして、A~Eの好意的な他者とH~Jの非好意的な他者とは、次に述べるクラスター2と比べてはっきり分離している。主成分分析の結果の特徴は、好意的な他者群の中に〈現実自己〉が含まれてしまっていることである。全体としては、「望ましい」の側から〈理想自己〉・好意的他者群・非好意的他者群の順で並んでいる。個々のメンバーのS-I.S.図を見てみると、〈現実自己〉と〈理想自己〉の間の距離はあまり大きくなく、しかも両方の自己と好意的な人物との距離は小さくネガティブな人物との距離は大きいという点は共通していた。そこで、このクラスターを自己一致型とし、次のクラスター2と比較して他者がひとかたまりにならずに大きく分離していることを考えて「自己一致・他者分離型」とした。

クラスター2では〈理想自己〉と〈現実自己〉の間の距離の平均が男子の全クラスター中最も小さかった。また、他のエレメントもすべて〈理想自己〉と〈現実自己〉からの距離の小さい所でひとかたまりになっていた。

〈理想自己〉・〈現実自己〉の両方の近くにA~Eの好意的な他者が集まっており、そこからあまり離れずに両自己からの距離の大きい方に非好意的な人物H~Jがい

る。この好意的な他者と非好意的な他者座標平面上での分離の度合いは、先に述べたクラスター1に比べるとかなり小さい。個々の被験者のS-I.S.図を見ると、少数のエレメントがかなり離れて存在するケースはあったが、全体として平均のプロットから得られた特徴は確かめられた。主成分分析の図を見ると、中央付近にほとんどのエレメントが集まっているのがわかる。〈現実自己〉と〈理想自己〉にはさまれて好意的な他者が位置している。非好意的な他者はここからやや離れて、〈現実自己〉に近い側にある。以上の特徴からこのクラスターを自己一致型とし、さらに、他者エレメントがひとかたまりになっていることも考慮して、クラスター1と区別するために「自己一致・他者非分離型」と命名した。

クラスター3では、〈現実自己〉と〈理想自己〉の間の距離はほぼ全体の平均に近い。そして、両方の自己から中程度の距離の所に他のエレメントがかたまって位置している。エレメント全体として、〈現実自己〉との距離のほうがやや小さい。非好意的な人物と好意的な人物は、現実の自己からはほぼ等距離にあり、〈理想自己〉からの距離の違いで分離している。主成分分析によるプロットの特徴は、好意的な他者群が〈現実自己〉を含んで小さくひとかたまりになっていることである。個々の被験者のS-I.S.図を検討すると、エレメントが小さくかたまっているものやエレメントが全体に大きく散らばっているものまでかなり様々であった。しかし、すべてのメンバーが、これまでに述べた自己一致型と次に述べる社会的疎外型との中間の型である点では共通していたので、このクラスターを「中間型」とした。

クラスター4では、〈理想自己〉と〈現実自己〉の間の距離の平均はかなり大きい。他のエレメントはすべて〈理想自己〉と〈現実自己〉の両方から遠く離れており、非好意的な他者と好意的な他者はかなり分離している。主成分分析の図によれば、ほぼ第1主成分の軸に沿う形で〈理想自己〉・好意的な他者群・〈現実自己〉・非好意的な他者群の順で並んでいる。〈現実自己〉からみて、好意的な他者と非好意的な他者は反対の方向にあることになる。S-I.S.図と主成分得点の平均値のプロット図から得られた以上のような特徴からすると、このクラスターは「自己疎外型」と名付けるのが適当なようにも思われた。しかし、個々の被験者のS-I.S.図を検討すると、〈現実自己〉と〈理想自己〉の距離が非常に近いものも、他のエレメントが自己から遠く離れて位置していれば、このクラスターに分類されていることからこの名称は放棄した。結局、このクラスターのメンバーに共通の特徴は、他者エレメントと両〈自己〉との距離が大きいということ

ころにあると判断し、「社会的疎外型」と名付けた。

クラスター5では、〈現実自己〉と〈理想自己〉の間の距離は、男子の全クラスター中最も離れていた。他のエレメントと両自己との間の距離は大きい。好意的な他者は〈理想自己〉側との距離が小さい。そして、〈現実自己〉からは好意的な他者よりも非好意的な他者の方が距離が小さくなっている。主成分分析によるプロット図では、横軸上に〈理想自己〉・好意的な他者群・非好意的な他者群が並んで位置し、非好意的な他者と同じくらい「望ましくない」所で「非活動的・弱い」の方向に寄って〈現実自己〉が位置している。好意的な他者が〈理想自己〉と〈現実自己〉にはさまれて、しかも〈理想自己〉側にかなり寄った所にあるというのがはっきりした特徴である。個々の被験者のデータについてもこれらの特徴はほぼ確認できた。そこで、「自己疎外・現実自己孤立型」とした。

次に女子についてであるが、クラスター1では〈現実自己〉と〈理想自己〉の間の距離はかなり小さい。そして、両方の自己からの距離が小さいところに好意的な他者が、距離の大きいところに非好意的な他者が位置しており、両者はかなりはっきりと分離して分布している。主成分分析の結果をみると、好意的な他者群の中に〈現実自己〉が含まれている。しかし、好意的な他者群の散らばりは大きく、〈理想自己〉にかなり近く位置しているものもあった。〈理想自己〉・〈現実自己〉・好意的な他者群は「望ましい」側に位置していて、非好意的な他者群のみが「望ましくない」側に遠く離れていた。個々の被験者をもてこうした特徴は共通してみられた。次に述べるクラスター2と区別するために、このクラスターは「自己一致・他者分離型」とした。

クラスター2では〈現実自己〉と〈理想自己〉の間の距離は女子の全クラスター中最も小さくなっている。また、他のエレメントも全て両自己から近いところでひとつかたまりになっている。好意的他者群と非好意的他者群は、〈現実自己〉からはほぼ等距離で、〈理想自己〉からの距離でやや非好意的他者群が遠くなっている。主成分分析の結果によると、他のクラスターに比べて狭い範囲にエレメントがかたまっている。〈現実自己〉からみると、好意的他者群と非好意的他者群は反対の方向にあり、〈現実自己〉と〈理想自己〉で好意的他者群をはさむような形になっている。個々の被験者のS-I.S.図をみると、好意的他者群と非好意的他者群が混然としているものと、やや分離しているものの両方があったが、クラスター1に比べると分離の度合いははるかに小さかった。そこで、このクラスターを「自己一致・他者非分離型」

とした。

クラスター3では〈理想自己〉と〈現実自己〉の間の距離は平均に近くなっている。他のエレメントも、両方の自己からほぼ平均的な距離に散らばっている。好意的他者群と非好意的他者群は〈現実自己〉からはほぼ等距離にあり、〈理想自己〉からの距離の違いで分離している。主成分分析の結果をみると、〈現実自己〉から見て好意的他者群と非好意的他者群は反対の方向にある。好意的他者群は〈理想自己〉と〈現実自己〉の間にはさまれている。個々のメンバーをみると、エレメントの配置はかなり多様であったが、平均的な距離の所に分布しているエレメントが多いという点では共通していた。このクラスターは「中間型」とした。

クラスター4では〈理想自己〉と〈現実自己〉の間の距離は、やや大きめである。両方の自己から他のエレメントまでの距離もやや大きくなっている。また、〈現実自己〉からはほぼ等しい距離に好意的な他者と非好意的な他者が並んで位置している。〈理想自己〉と好意的な他者との間の距離は小さく、非好意的な他者との距離が大きくなっている。主成分分析のプロットをみると、第1主成分の軸に沿って「望ましい」の側から〈理想自己〉・好意的な他者群・〈現実自己〉・非好意的な他者群の順でならんでおり、〈現実自己〉は「望ましくない」側に寄っている。〈現実自己〉からみると好意的他者群と非好意的他者群は、等距離ではあるが反対の方向にある。個々の被験者について検討した所、いくつかのエレメントは〈理想自己〉に近い所にあらわれている場合が多く、平均値によるプロットの場合ほど〈理想自己〉は孤立していなかった。一方、〈現実自己〉に関してはこういった傾向はうかがえず、孤立しているものがほとんどであった。そこで、このクラスターを「現実自己孤立型」とした。

クラスター5は〈現実自己〉と〈理想自己〉の間の距離は女子の全クラスター中最大になっている。他のエレメントと両自己の間もかなりはなれている。好意的他者群と非好意的他者群は〈現実自己〉からはほぼ等距離に位置し、〈理想自己〉からの距離の相違で分離している。主成分分析の図をみると、〈現実自己〉からみると、好意的他者群と非好意的他者群は等距離であるが反対の方向に位置している。個々のメンバーをみると、両自己の乖離の度合いは平均以下になっているものはなく（自己疎外）、しかも好意的な他者がやや〈理想自己〉側によって〈現実自己〉から遠く離れている（現実自己孤立）という特徴は全てに共通していた。そこで、このクラスターを「自己疎外・現実自己孤立型」とした。

B. S-I.S.の類型と学年の関係の検討

これまでの分析で得られたS-I.S.の類型をもとに学年別に度数を集計したクロス集計表を男女それぞれについて作り、学年差を検討した。

男子については、自己疎外・現実自己孤立型は社会的疎外型の極端な形であると判断し、この2つをまとめて社会的疎外型として集計した。また、女子の場合も、自己疎外・現実自己孤立型は現実自己孤立型の極端な形であると判断し、この2つをまとめて現実自己孤立型として集計した(表1・表2)。

表1 S-I.S.と学年の関連(男子)

	中学1年	中学2年	中学3年	高校2年
自己一致・他者分離型	4	12	7	9
自己一致・他者非分離型	7	3	4	11
中間型	8	6	6	5
社会的疎外型	13	7	17	8

表2 S-I.S.と学年の関連(女子)

	中学1年	中学2年	中学3年	高校2年
自己一致・他者分離型	8	3	3	3
自己一致・他者非分離型	5	8	10	17
中間型	7	9	12	3
社会的疎外型	16	12	14	8

χ^2 検定を行った結果、男子では $\chi^2=16.510$, d.f.=9で、 $P=0.057$ 、女子では $\chi^2=19.921$, d.f.=9で、 $P=0.018$ であった。クラスター分析の結果得られたS-I.S.の類型と学年との間には、何らかの連関があると考えてよからう。

次に、この連関がどこのセルから生じたのかを、Wickens (1989)の方法により探った。その結果、男子では中学2年での自己一致・他者分離型と高校2年での自己一致・他者非分離型が多く、女子では中学1年での自己一致・他者分離型と高校2年での自己一致・他者非分離型が多かったことにより、それぞれの連関が生じていることが示された。

C. 「導きの星」としての他者が出現する頻度の学年差の検討

「導きの星」としての他者は、Norrisらの枠組みに従えば、〈現実自己〉の同一性の形成に“似ている”というポジティブな形で貢献していないが〈理想自己〉像の明確化にはポジティブな形で貢献している他者であると

いうことができる。これは、S-I.S.図上では、〈現実自己〉との距離は小さくないのに〈理想自己〉との距離は小さくなっているエレメントとして現れることになる。このようなエレメントは、一人の個人の認知空間の中に大勢現れていなくとも、一人だけ現れていればそのことに十分意味があると考えられる。そこで、このようなエレメントが一人でも現れている被験者を選び出し、その学年別の比率を比較検討するという分析を試みた。

具体的には、〈現実自己〉には近くなく(距離値およそ4以上)かつ〈理想自己〉に近い(距離値およそ4以内)エレメントが一人でも現れている被験者を選び出すという評定作業を筆者のほか2人の教育心理学専攻の大学院生に行ってもらい、3人の評定者のうち2人以上が一致して選んだ被験者の学年別の比率を求めるいう方法をとった。

この手続きにより、中学2年・中学3年でこのようなエレメントの存在率が高くなり、高校2年で再び低くなるという結果が、男女ともに得られた(表3・表4)。中学2年・中学3年における比率と、他の二つの学年における比率について、比率の差に関する検定を行った結果、男女ともに5%水準で有意という結果を得た。(男子: $Z=2.03$ 女子: $Z=2.19$)

表3 「導きの星」としての他者がいる者の人数(男子)

	該当する人数	全体の人数	比率
中学1年	9人	32人	28.1%
中学2年	16人	28人	57.1%
中学3年	15人	34人	44.1%
高校2年	12人	33人	36.4%

表4 「導きの星」としての他者がいる者の人数(女子)

	該当する人数	全体の人数	比率
中学1年	18人	36人	50.0%
中学2年	23人	32人	71.9%
中学3年	23人	39人	59.0%
高校2年	13人	31人	41.9%

このような、「導きの星」としての他者像を経験する者は、男女ともに中学2年・中学3年の頃に多いと見ることが出来る。

IV. 考 察

本研究では、思春期における同性同年輩の他者に関するS-I.S.についてクラスター分析による分類を行った結

果、男女ともに“自己一致・他者分類型”“自己一致・他者非分離型”“中間型”の3類型が見いだされた。そしてさらに、男子では“社会的疎外型”，女子では“現実自己孤立型”が分類され、これらの極端な形として“自己疎外・現実自己孤立型”が男女ともに現れた。

これらの類型のうち，“社会的疎外型”，“現実自己孤立型”及び“自己疎外・現実自己孤立型”については、発達的な変化は現れなかった。これらの類型は、現実自己と理想自己の隔たりが大きいことが特徴となっている。この隔たりの大きさは、従来、一般的な適応の指標と考えられており、これらの類型は個人の不適応感と関連があると思われる。また、他者と関連づけて自己をとらえるという観点からみても、自己と同一視するのに適切な他者がいないことを示しており、やはり不適応感との関連が考えられる。また、松井(1990)によれば、これら諸類型に対応すると思われる“準・自己疎外型”，“現実自己孤立型”，“自己疎外型”においては、いずれも対人不安の度合いが強いとされており，“中間型”も含めた“自己一致型-中間型-疎外型”という軸が“適応-不適応”との関連が強いことが示唆されよう。しかし、本研究の主眼は対自他認知体系の発達的な変化にあるので、この点に関してはこれ以上触れないことにする。

発達の観点から見た場合，“自己一致型”が“他者分離型”と“他者非分離型”に分かれ，“他者分離型”が多い時期(男子で中学2年，女子で中学1年)から“他者非分離型”が多い時期(男女とも高校2年)へと移り変わっていくことが示されている。このように自己一致型が他者の分離-非分離という観点から2つに分かれるというのは従来の研究では指摘されていない点である²⁾。しかも、そこには発達的な意味合いが含まれているので、この“自己一致型”の2類型の差異がどこにあるのかさらに検討を加える必要がある。

まず，“他者分離型”では全ての他者を断定的に評価しており“他者非分離型”ではそれとは逆に断定的でない評価をしているという可能性が考えられる。そこで、実際にどのような評価が行われているかを確認するため、評価に際して1または5の極端な値をつけた度数と2または4の評価をした度数の割合を、類型ごとに算出して比較した³⁾(表5・表6)。すると、男子でも女子でも“他者非分離型”では、2~4をつける比率が高く、1または5をつける比率が低かった。つまり，“自己一致・他者非分離型”に属する被験者は、他者について断定的な評価を下さない傾向があるためにこのような他者が一かたまりとなるという特徴が現れたと考えることができる。現実の他者を様々な観点から認知して、微妙な差異

にも目を向けた上で、かなり手の込んだ印象形成を行っているようである。これに対して“他者分離型”では、好意的な他者についてはいつでも“社会的に望ましい”方向に極端な評価をし、非好意的な他者に対してはいつでも“社会的に望ましくない”評価をしており、“非分離型”に比べて他者を断定的かつ一面的に、“社会的望ましさ”という外的な枠組みからとらえているようである。

表5 S-I. Sの類型別の項目評定の度数分布(男子)

	1または5	2または4	3
自己一致・ 他者分離型	1,426 34.7%	2,008 48.9%	1,174 25.5%
自己一致・ 他者非分離型	416 11.6%	1,793 49.8%	1,391 38.6%
中間型	829 23.0%	1,538 42.7%	1,233 34.3%
社会的疎外型	2,288 44.1%	1,792 34.6%	1,104 21.3%
自己疎外・ 現実自己孤立型	521 40.2%	399 30.8%	376 29.0%

* 上段は度数，下段はクラスター内での比率

表6 S-I. Sの類型別の項目評定の度数分布(女子)

	1または5	2または4	3
自己一致・ 他者分離型	1,090 44.5%	895 36.6%	463 18.9%
自己一致・ 他者非分離型	765 13.3%	2,573 44.7%	2,422 42.0%
中間型	1,162 26.0%	1,899 42.5%	1,403 31.5%
社会的疎外型	1,849 33.8%	2,261 41.3%	1,362 24.9%
自己疎外・ 現実自己孤立型	1,030 59.6%	394 22.8%	304 17.6%

* 上段は度数，下段はクラスター内での比率

言い換えれば，“他者非分離型”における自己一致は、他者と他者、あるいは自己と他者との間の微妙な差異を現実的に検討した上での、あるいは検討の途上での、より成熟した現実的自己一致であると言えるのではなからうか。一方，“他者分離型”は、社会的望ましさのかたまりとしての非現実的な理想自己と幻想的に同一視した自己一致であると思われる。Norrisたちは、自己一致が現れる場合として、①理想自己の質を現実自己のレベ

ルまで切り下げている場合②現実自己の質を理想自己のレベルまで非現実的に持ち上げている場合③一時的にであれ、現実的に理想が達成されている場合の3つを挙げているが、このうち①と②の非現実的な場合が“他者分離型”の幻想的一体感としての自己一致、③の現実的な場合が“他者非分離型”の現実的でより成熟した自己一致であるということもできよう。

そして、本研究で示された、男子では中学2年、女子では中学1年のころは“自己一致・他者分離型”が多く、高校2年になると男女ともに“自己一致・他者非分離型”が多くなるという変化から、思春期における対自他認知体系の発達の変化は、非現実的な理想自己との幻想的な一体感としての自己一致が優位な時期 (Sullivan (1953) によれば、“自己についての観念がautisticでfantasticな段階”) から、自分の枠組みに基づいて自他をとらえた上でのより現実的な自己一致が優位な時期への移り変わりであるととらえることができる。

さらに、この二つの時期に狭まれた中学2年・3年の時期には、「導きの星」としての他者を持つ者が多くなる時期であった。この「導きの星」としての他者との比較を通して、理想自己のもつ意味合いが、社会的望ましさのかたまりとしての幻想的な理想自己から、個人の内的な枠組みに基づいた現実的な理想自己へと変化しているのではないだろうか。これは、Blosのいう、理想の他者を自我理想として自己の中に取り入れるというプロセスと関係が深い。そして、このような理想自己の質的变化が起こった結果、“他者分離型”の幻想的な自己一致から“他者非分離型”の現実的な自己一致への移り変わりが起こるといふ変化の道筋が考えられる。

本研究で示された知見は、臨床場面など現実に思春期の子どもたちにかかわる中で、彼らの対人関係を理解する上での重要な枠組みを提供するものと思われる。しかし、本研究では数量化されたデータからそれぞれの類型における対人認知のあり方を類推する方法を取っており、現実の個々の子どもたちが他者を自己とどのように関連づけて認知しているかということに関する情報は直接には得られていない。今後は、面接調査のような手法も取り入れて、個々人が実際の対人関係の中でどのような認知を行い、どのように感じて生活しているのかをとらえていくことが重要である。特に、臨床的観点から考えると、適応がうまくいっていない可能性のある“自己疎外型”“社会的疎外型”に関する知見を得ていくことは重要であろう。

(指導教官：近藤 邦夫教授)

注

- 1) Norrisらの挙げたこれらの特徴は、個々の臨床例に見られたS-I.S.の特徴を記述したものであり、松井(1983)や本研究におけるようなS-I.S.の分類を意図したものではない。
- 2) 松井の分類を詳しくみていくと、女子の自己一致型と準・自己一致型はそれぞれ本研究の他者分離型と他者非分離型に対応する可能性がある。示された図では、自己一致型では非好意的な他者が離れて存在しており、準・自己一致型では他者は一かたまりになっている。男子でも、松井の自己一致型と準・自己一致型が本研究の他者分離型に対応し(ただし、松井の自己一致型(男子)は1人しかおらず、類型として取り上げることに疑問がある)、中間型が本研究の他者非分離型に対応するかもしれない。しかし、いずれにせよ分類にあたって他者が分離しているかどうかという観点を松井はとっていない。
- 3) “極端な評定をする傾向”というこの指標は、Applebee (1976)で、認知の分化度を表す指標として用いられている。

文 献

- Applebee, A.N. 1976 The Development of Children's Responses to Repertory Grids. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 15, 101-102.
- Blos, P. 1962 *On Adolescence*. New York: Free Press. (野沢栄司(訳) 1971 青年期の精神医学 誠信書房)
- 林 文俊 1978 対人認知の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科) 23, 233-247.
- 井上正明・小林利宣 1985 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観 *心理学研究* 33, 253-260.
- Kelly, G.A. 1955 *The Psychology of Personal Constructs*. New York: Norton
- 松井三枝 1990 対人不安と対自他認知体系—Self-identity Systemの検討— *心理学研究* 61, 94-102.
- 村瀬孝雄 1983 思春期の諸相 飯田真・笠原嘉・河合隼雄・佐治守夫・中井久夫(編) 岩波講座 精神の科学6 ライフサイクル p.141-180. 岩波書店
- Norris, H. & Makhoulouf-Norris, F. 1976 The Measurement of Self-identity. In P. Slater(Ed.) “Explorations of Intrapersonal Space: The Measurement of Intrapersonal Space by Grid Technique. Vol.1.” London: Wiley
- 岡田 努 1987 青年期の自我理想とその形成過程 *教育心理学研究* 35, 116-121.
- Sullivan, H.S. 1953 *Interpersonal Theory of Psychiatry*. New York: Norton. (中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鐘幹八郎(訳) 1990 精神医学は対人関係論である みすず書房)
- Wickens, T.D. 1989 *Multiway Contingency Tables Analysis for the Social Sciences*. p.246-267 Chp.10. Structural incomplete tables. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.